

「出題の意図」

選抜区分	2024年度（選抜区分：学校推薦型選抜） 文学部 比較文化学科（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	<p>問題Ⅰ 問4</p> <p>問題文の主題に関して意見を述べさせることにより、英語の読解能力、英文の構成能力（英単語、英文法、英語構文に関する知識）、発想力、論理的思考力を問いました。</p> <p>問題Ⅱ 問1</p> <p>出題の背景</p> <p>学校推薦型選抜の小論文は、渡辺裕『聴衆の誕生：ポスト・モダン時代の音楽文化』（1989、増補版 1996）から一部を抜粋して出題しました。テーマは音楽ですが、楽曲を分析したり評価したりするわけではなく、音楽の演奏のされ方や聴かれ方が、時代とともにどう変わったのか、なぜ変わったのかを論じています。音楽という一つの文化的事象に、歴史的あるいは社会学的にアプローチするような研究もありえることを、これを機に知ってください。また、ここでの「音楽」を、例えば「映画」や「サッカー」や「テレビゲーム」などに置き換えても研究が成立するのではないかと考えを巡らせて、自分の興味・関心と学問・研究とを結びつけてみてください。</p> <p>求める能力</p> <p>問題文から、「マス・カルチュア」という概念が何を意味するのかを、その成立背景とともに理解する読解力、その理解を簡潔にまとめて言葉にする論述力、さらに、さっそくその概念を用いて身近な事象を文化論的に分析し説明する思考力を問うています。また、問題文があついている演奏会という主題にひきずられ、ショー・ビジネスのなかだけに例を求めるのではなく、身のまわりのあらゆる事象が文化論的考察の対象になり得るのだと気づくには、柔軟な発想力も求められます。</p> <p>解法(解説)</p> <p>「マス・カルチュア」という概念を説明するよう求められているので、問題文からこの語を説明している箇所を見つけ出し、内容を咀嚼して、簡潔な言葉にまとめる必要があります。このとき、問題文の表現をそのまま切り貼りしても結構ですが、自分の言葉に言い換えて、凝縮してしまえば、そのぶんの字数を、後半の記述に充てることができます。</p> <p>後半部分では、「不特定多数」の消費者を相手に、ビジネス本位に文化が成熟あるいは衰退していった例をひねり出す必要があります。技術の</p>

進歩や、考え方の変化、環境や社会構造の変化などを要因として、ある文化の担い手（中心となる消費者の層）も変わり、それにもなってその文化のあり方自体が大きく変わった、というような変化の連鎖、因果関係を見出し、言葉にしてください。何をどの順番で書き連ねるかが重要なので、まずはメモを取り、構想を練った上で解答欄に書き記す（清書する）必要があるでしょう。つまり、重要な要素が解答に含まれていても、それら同士の因果関係が整理されていなければ、評価はされません。

以下、いくつかの解答例を示します。

解答例 1

限られた範囲での個人的な人脈に依存せず、むしろ不特定多数の関心を集め支持を得ることでビジネスとして成り立っているような文化を、「**マス・カルチュア**」という。その成立背景には、中産階級が新興し、文化の主な担い手となったことがある。このマス・カルチュアの出現であり方を大きく変えたものとしては、例えば**骨董品収集**が挙げられる。かつては一定の見識をもった収集家が骨董屋と個人的な信頼関係を築き、掘り出し物の流通情報を特権的に得ていた。しかし現在では、ネットオークションの普及により、さほど専門的な知識をもたず資金も限られた素人でも、興味本位で骨董品を漁り、市場に参入できる。また、専門的知識を養うにしても、インターネット上の情報を参照すれば、個人的な人脈や特定のコミュニティによらずとも、独学が可能である。そして出品者からしても、商品が高額で売れさえすればよいわけで、購入者がどのような人間かを特に問わない。(400字)

解答例 2

「**マス・カルチュア**」とは、個人的な人脈によらず、不特定多数の関心・支持を集め、よくもわるくも商業ベースにのっているような文化である。新興の中産階級が貴族に代わり文化を担うことで生れた文化だ。マス・カルチュアの出現で変容したものとしては、例えば**将棋**がある。かつては家族や親戚、友人、近所の知り合いからルールを教わり、ある程度熟練したのち地元の道場に繰り出すなど、地理的な制約と限られた人脈のなかで対局を重ねざるを得ず、新聞やテレビを通して垣間見るプロ棋士は遠い憧れの存在であった。しかし現在では、アプリを通して見ず知らずの誰かとインターネット対局が手軽に楽しめ、実力の調整とマッチングも自動で行われる。さらには、プロ棋士が個人で動画を配信して体験を生々しく語り、素人向けに具体的な技術を指南し、視聴者と交流を行っており、このような地道な普及・広報活動が、文化であると同時に業界としての将棋を支えている。(400字)